

猿蓑四歌仙解

全上

中村俊定文庫

文庫 18

802

1







越後の国水原の鈴木代菊山ハカ

つらゝのむきもやしくも志しきまは

ひりおけるそれのそらもかゝりし能世の

側名本をきこつる事致さぬめりもや

つらゝのほをき書て既上の二巻とあるれり

ありいさやの猿蓑しふ四羽ひたるもれありハ

てしよりきく平話も越つる志しきも

あるや眼もきぬ枝雲もほききし語しぬ





孝の要なりとて争ふ事なくともありて  
いふにありていふありていふありていふありて  
かくれざる哉すまの家の風行らすことを  
まじり家を分て人の心やまらうとめんと  
まじりのなきのまじりあるや地を地家と  
習ふ者の等閑なるものなりといふ惜哉  
荆山七十ことばのそとにありぬとて孝子  
聖徳は福をいとなめありこれと極楽に

ちりてありていふことなきをいふ  
この因縁ありての序ハ素つたはま  
いふことをいふも書いふこと大にして  
おもしろき事なりいふものもいふ世よ  
あまの一日もいふも面あふはあま  
今又恨のなきことかく言はるるも  
かゝる老る事いふもいふことあまの  
とていふことなき事かゝる事あまの華



とり終りぬ

久政まろまのそ——雲は月未のやうの日

ハル国 寛多 抄

序

猿蓑四歌仙解卷一

越後 水原

鈴木荆山著

男野梅校

去來

式部の羽も刷カヒツシロヒぬまろ——これ

式部時多不雨ひ樹は付て羽をかひつくふさや空然と  
尺毛まろ謝肇湖ワ五難俎ニ云々道風テ飛魚ヒ道  
水行ニ香風子遂ハ羽順なり急糸子さまハ鱗  
順ち利木の式部風子むまてあそこ  
一吹き風のあはれまろ山まろ  
字面子尺毛まろなろ——時角滑ふんとまろ風一

芭蕉



陳して木の葉吹散し一紙して風やむ二句の  
男一時とりこれ葉を著然とる子や雪の時あり  
むまてあふみの付白まを照るあり

殺引の勢ありぬる川こえさ

元龍

是人用事有りて出りまをかり昨夜の雨ま  
神水溪流新らた子み風まをあやしくあのみ  
あつり白中流の芳まをさるえや前二句の葉然  
た子朝川こえさ付て白の勢まをさるハハ  
風れくちの三句ともに味合せて餘情限なく  
狂を成は志のりれ馬

史邦

第三句のまをま徒子して只かろく會釈まもの  
又ままの法けとるか葉影散かて一葉秋初冬の葉  
散やまのま一句のまハ耕化の言を除えた先に  
て向中殺生のま又とるは蓋種くしてまちま回白目  
伴の

まのく戸ま著遠かろる雪の月

薰

まのく戸まよと板ま豎ま井入れたるまの寄附まを  
にまてあつたり此句散るに衰廢したるまとま  
程を感す篠りのまと云又まのく戸ま著此か  
たるま夕月のわつるまよとる此二句散合せて味



ふれはくまも 幽村の暮暮かきりなく 言語は迷ふた  
— 花翁の句なればきり

此句翁の藤つりの弓は付はえんは自然歌の以て  
翁句は助たるはけのちと人あり

翁句よりありにきて五句は申て人もありは  
地母の同じやうして格のむ変化なきは似た  
れもあ句おしむきあり味深くして面白く  
おれ誰かを理のなきものなれば変化格折皆  
自然のよありきよ但すつなきなり

人よもくれは名おの梨子

邦

おの句は見えれをお句はよくちと見ぬ歌仙の表の内  
お思ひの多はかきあるあふ梨子はくれすとあるは存家  
の人ありと見えくはふらむるをうらふしはふと見え  
たあふもらんふちの庵にあり梨子とふて住する僧  
比吞みて人よもくれぬありおれ山僧を懐くうとさ  
とさおのうらむ

此歌仙おのさうして見よの人おもるとんたり  
兼好の後院草子<sup>十一</sup>お版は云神を月のは粟栖野  
とよとをを過りてあるはうも存入を傳へてにき  
同く心細く住たら庵ありて同く閑か柳は兼好



葉ちとそありれは又ほとまわあこの庭子椅子  
の樹のそよしたわになりたるまもろひ  
くむひたりーそすーまさあて以本な  
うらまーあはとおへーあとおの人まられたる  
物の梨子の句も松とさうあれと人まらぬ人  
たまに世外の人とおもわれ侍りぬ

かきたく家と墨持おろーく秋をそて 邦

書画する人席上菓子盆ちとに茶をそてあつて  
ころまらたさうくふそ枝のさまなり相花物の  
梨子前と句もそ葉門の人まはけあーまを画

人まはくあれ一の梨子前後よりくみだれとも人傷の  
あはらひおれまらるるるるるるたり

七新集歌集の奇仙

おらひひ葉もうれに身のそち 珍碩

座跡のまは夫とおとされ 全

旅すうく穉百人の姫はれく 路通

あれまらるる名物の梨子以下三句の付植稿とお解  
直来某村集の附合を又ら此例又たり何れま  
如はけ合いつるにさう穂ちう上るてさかひま  
とさう初の人ゆあく心をもちあはるるあたり菊



の付向を有るものいまだあれは又たおぼす  
 座席のうしろに犬ハ申留まりありて前後の人を威  
 す名物の様子と申すおまを前後の人より見た  
 らぬ中の犬前後へかぶり中の様子前後へあら  
 ざる此付向七部集よりこれおの二ヶ所の  
 たることありよき先りやすれと感 北兆  
 是前向画人のいきたる是感別とありて  
 此と云ふ利付うし一変はなり後て志す  
 だし必要と変化する極ありといふはあは  
 何事しそ言のうちり志しあり 来

此付向ハ殊ニエ支すへきおなりえさうと  
 ありやすの是感といふは画人ハ付向  
 系そ向新うとありはさうと付くも又  
 是感の用多付付くも三句の極極極ありは  
 におの付向ハ前向付くも後りせらるるは是  
 代家といふものは趣向を立るなり相又そふ  
 候えすといふんとするは年と云ふは男子主人の  
 親ら必恐へき人ありなり一先りおの是感  
 異やうのものなれば親主人よりいつまやといふ  
 此後てハ申すけち一そ言の也と云くみらる



舞は行つてとあり是予も後見只  
おろしくハ他若の言はあつたさうの跡立れ  
ともさよおのあまの解法をたのむかゝり  
たまのふ三句目とあり三十句の内五句  
をふくまの難所あり初心解く工夫す  
所をやすく付ふを考へ排すと極へ

より初て年の貝吹く

蕉

冬言の句はあつたさうと云ふ静かなは行へ  
打鼓一三句のさうと云ふの言ありさう  
く付方あり人の抱ふは此付と云れはよく作ら

かけられたる此を思ふぬ付方と云ふ一相  
付心を抱ふさうひりひりさうありてま  
より久く初は解く通くさうあるに年時の貝を  
吹を吹くまの貝ハ村外屋敷の善徳とあり  
あ何事飯時の貝なり一さうあるはほの  
たのむの跡はほけさうをまはさうなり  
付く又れハ静のさありさうおとひよぬ  
付方と云ふ一さうあるは後其の心え  
とさうハ付方ひりひり飛騰さうなりたう  
へ一静き付方なり一さうハ人の見ゆ



又りし心通は其言の如きつうとめられたり  
 ほつれた家其自の床あきの志しとふと他  
 又りし初ふとふは村木門を付たつたは物  
 松ちつた家のちちつた人あきつとてさる  
 のりよそのの器財用具付言理を言ふ  
 と言外の言は倉と筆紙とて物なと  
 浮たふとせばは行つてものさしれと  
 とのさしとふとあきつとてさる一若事の  
 又りしものさしとて又床とさしとふ  
 半園のちちつたは上とさる云字紙下下

に志しとて優はあつた白化さ紙同さる初ふの  
 人浮くおとさく自己の心はとす

芙蓉の花乃びつくとちあ 邦

おほしたるあきつ朝露をさまりて後芙蓉は教  
 なる人又芙蓉とさる人の用多ありて花は解れ信ら  
 ものさ付く信はぬ理はひかすけれも床産は美  
 蓉といは蓋は終の二つ紙よりあきとていしともて信  
 梅耳はたはに却て穂は糸糸糸親てやの此言  
 を産産信しとてさると芙蓉の花とて脈を以て  
 見ると一自ら知易とる



此あり月の白あききとあまきあめ次春の月  
出然ハ此き入暮を月の代り月用て一句の秋を不  
一社二句を有きて却て春の月をむせりあつら  
いづれ是歌仙の要所と見え

吸まのハ中月が来きれ 一寸見ん 蕉

白かろく穂はそきほふりきあつらね  
とらあききとあまたおもてあ

志見んハ川若なり肥後水前寺の産より  
若はく湯はらるる所とて一のらあつらね  
くはあききとあまたおもてあ

ろき吸物と見え

三句ありはみちかえけり 来

あの人様とあつらねけのまに橋おかけ  
あまはなれ物師なるまあまありて用ひ  
の時刻とて一あまはなれおを家吸物といと  
き一因あつと縁附ける体なり

前句吸物あつらねとあつらねて吸物  
あつらね家の人乃語とて一尺外より  
なる人といふ句はあつらねてあつらね

あつらねと盧同く男のあつらねて 邦



あのとともつゝ盧同の晋子までも重男の主人をせむる  
用る事多し男とあはせけり家ものなり男は何  
そ前句に云ふあまりのたかえたる人なり男の  
主人名は何ともさあへりあへり云ふに盧同をえ  
らみたるをえたるておしとらるる一これ一篇中の  
模様と見えり

盧全ハ唐の詩人居東都韓愈為河南余愛  
其詩厚禮之全自号玉川子云々今ハ字書ニ

右の同字

又いそぐ侍男といふかたハ男ハ奴僕卑賤の人

志のたに主人の用ををまへりす衆うけらるすひあ  
を辨謝するに三月あまりの左を以てはこれ社家  
故にこれとら世の主人ありこれ義何る盧全の  
家はをへりて重徳は化したるものありこれよと  
あつ男をよき人をとて云ふなり若人ありあつ  
三年のそり居形ハ重徳とありこれ後を多く  
三月あまりとて三月を居形とて三月は對  
白化したるものなり初心ふく思は費し味ふ  
へきととらなり

さし木つぎたる月のお目くら



ふれハ盧全の男を年一た多とつふはけたるなり  
去のの去は申先て年公は入たる時一木波  
昔なる一終に今年春ふいりて芽は  
出たさ一木根付たる故知るなり土うれを盧  
全の家子二月月をさるりありお母は  
よそ月を法けたるゆふなたり別さあるなり  
昔なる一花は昔なるよお鉢

蕉

前句法一は法子月おほるなりふれ二月初旬  
なる一習きえをいひくいまうなりは  
去ののまにあり一を昨今は先て帚をか

ねはふれ六月もまとお母ありなりお母は  
先子お鉢なと昔はきたる故愛一花は對  
母とよくおきななり一なるなり一お母  
るねの年とね一の子お鉢を見て合紙すは  
味は一物お菊の白なり水は月のうらな  
とハ鑿堂は過く一

ひよりふり一今朝のはしたち 素

風は起き子使頼き用具を帯ふと朱子家  
訓子見たり一招り学無のまありは男子常  
ゆはあり一物お菊の時前句昔の子お鉢今朝



とらふよ自り親一又若はきたらふも新花子  
 道とく見たり人こころもちあふる一前子り  
 たらふあり一とあつらふはすくちあふる一  
 いらととをたに百のむれとちあふる一 此  
 是れ前白ひくはなりの一とあれは後立あり一  
 きしたつちんきうとときハ人短慮我侍平  
 なる付らん言ひふ年なれハ女家只一家一軒  
 の主人を侍り老も妻奴を総使する白條の  
 人無なる目のあつらふはすくちあふる一  
 の体あふる一

芙蓉の花乃ちよりてはまきてハ白人傷居  
 祈のこ乃変化よして格別のものをいさ  
 とつともあ向格一白さあつたうして見  
 う香に蕉門の附舎たつとふるきおたり  
 邊鄙の排士蕉つと稱するものもそ治のひ  
 ううらうの法おれ白とよは城市村居或ハ  
 山川草木ありハ人お禽獸ひまなくして  
 変化をちかむれも他位おれ一あふる  
 松又方れたる初めの人古今上手の筆を  
 足くほくユキを固あふる一







子等も好まなり又好まざるのちよある賤僧  
上方徳富山王業師若の言は若の煙火を照  
するもののかやうは是れとありて通に

千梅之わくかせわさいよく禪家車賤の俗も  
陪重と稱するものあり飯米を割と云り又後  
の俗とも云りよ子然れは去年の請小言なと  
煙を照せりて其陪重なるもの

保ときほみ子啼志まふなり

蕉

時多しよとあくなくなり山も若れて火ともは  
えらひな山をさりて月一歩らもののみを啼

志まふと日くれ後こまけきこた一羽も居ぬ  
なり

此の如風寒のちよあふ又山若のたるもの  
系物なと改行けさるんは清きすきもの  
の時多の句を叫とけしなり

被骨のまゝおきなり月あうらき 邦

此句人ありて冬の時急なり若くおとくやしくと  
病出暮暮の比すくくゆれとも病床を  
とふれに四月子いりて終ちうらなきなり時多  
もな啼志まふなり句中花をえぬ恨さなり



きつるもさすといふくすのねをちり

陣をかりて車引きこむ

飛

病人療治の大免出養生するなり前句瘦骨  
と子言語をまけと上稿ふありに乗りおも山駕  
籠やうの程まの制なるんをまけしりま  
の門子つこと状とさうりく講をかりて駕籠  
を今もなりおは車引まむと作る二百のや  
しうぬた免まきく次の作者よとくしてあふ  
ものなる

車とすまか駕籠とすまもよぬたさよ害

あつらふ

うきをいふを和歌垣あつらふ

蕉

てまの前句の車な婦人のうきとるなり妻  
人といふをいふ男子とるなり婦人のを家此  
隣は悲ひ居るなり思あふ和歌垣をよ  
そりて出てあひたまふ自らいふにちあ  
と婦人の言を通まらなり是淫乱のそ  
ありととも詩の郊衛あり和歌子相里  
の奇ありあひてとあむ

今やそのれのからぬ

本







を照りて床のそんぐ狼貝するそをうれ

喜てよ有照月の朝ほけ

来

あれ夜半よりのだまひたうまらうれ曉  
ちうくいとさ敷一あり何け月の何さるけけ  
敵味方の死骸累こて至悲なりけこ  
月八月のまゝ一旬のけ一きのこ月子用  
ち一

湖水の秋乃比良れ、初葉

蕉

け句をううあはあれといあふを居たふもて  
あれまほさきたる変化のおもひをすてく此前句

喜てよあり何け月とふ一旬まむふてそまを  
物けら

喜てよ有照月の朝ほけ湖水の秋乃比良れ  
初葉と一息は吟一ておも一あまきり限な一

湖水と比良と変化はくは秋の初葉と付  
をこころなり

志その戸や葛友ぬまほれそ身はよ正 邦

前句比良の初葉とほけ何となく和歌所下  
の句とあまそ心をまよ讀むと他なり紫のた  
からそ人をほれそをよまじ塵介此人



なり又此良の子と遊水の初髪子室の戸調  
然として出玄なる一

布子美なりか風の夕ぐれ

此

葛麦望るはハ葛秋やくさく風の夕ぐれ  
とを美するもの秋添重なるなり美佳の法付句  
なる一けく一秋三句ハ紫の戸乃句ハ終る  
此の句中秋をさすは合耳

此付句これまで変化の句よりして見て見れと一  
句の美なく字芳りするなりと云れども能  
階もさく礼美ある一けれハ前句のさすは

ひそまらしきを法付く前句を助るなり  
自分の句乃及なりん可ぬおのむよいと美は  
た法付く二句の若れおしあうん正を書とす  
アそれまこと初心の人己さる句此美をのこ  
いとする可なりと云すゆのこ

押合て寝るハ又立つらり枕

蕉

此の句をうのふは前句布子着習ふと子句の言  
外秋をこれさるぬれそそ秋をを趣向は立て是  
を身よりけて見れりもの何人の志しにとも旅  
旅旅人秋さむく夜明けを立口をれをねる



このまゝとてその衣もらたぐ又衣の巾のなと疎の  
なる本質なと不為よしとてその衣をきくある衣の志  
はるまゝありありの様に合くも存なり様情を  
いひのこたり

たゞらのや乃ありありのきをさる

来

鞠の大鐘を誦したるはと又その衣の火乃光り  
やまゝありて雲の志赤まなりまゝありてその志  
はるまゝありて又立つとあれもやまゝありて  
赤く又鞠立時とまゝありてその志赤まなりまゝありて  
又よ射にえよむるもてあめとてその又妙を付らる也

二十七

此かまひきりいひはくちるまゝの志

飛

おの付向彷彿とてその思量のおよもさるまゝ  
なれと初心の大免子解するものをれもかくもあ  
る志の志りいひ作つものハ武家乃技指をらるる  
御上人よありに皮部者の作の歎たるも一ハ鞠  
ハ人志よ志き跡介れ地志きけるなり大免天  
子映するれよその志とてその志よりえくも何  
方よりとてその志もみゆるまゝなり志いれもその  
たゞらゝあじ地志とてその志もその皮部者の志  
たゞらゝ予著上京せし時卯月の初洛外を



居たりし其の太秦ちうき子等りて廣くたる畠  
地あり其御徑の側子土を以てぬりたるあた  
一梅の屏を焚きてして四子數個の戸口を空  
各一らの直をひらり人子とてあれ皮所れ  
居るまありと然ハをふちたう子志しき  
物なるし

すく稀子かぢうの句あるとき見れ見  
と只身ん子付けてハ我れを又よとの  
ありまをほくと早句はあううに  
しめたるのそと危くそのまあたるを

けりあてまうの付句とい子なるし  
し系はあぬれ二十日より廿二日の  
名とまくとまうに君を子に  
とけりありあれあは同く若辛して其の  
まくあはら物まをたるのえらともの  
初めの人まくく一味ひく古人の若辛  
おもふし

杉畑の古屋ふよ本れ芽もをら 卯  
あけの次まはけのあまぬやうにい  
まてくるとまをえたりはけとら



とらふや

鞆とふ子すくく通ふひききあふ

猿蓑四歌仙解卷一

猿蓑四歌仙解卷二

越後 水原

鈴木荆山著  
男野梅校

市は其物のまぬひやなれ月

九犯

是はとて市河の市ありて一およそな後さあ

つら

阿つらと門くのちり

芭蕉

炎熱夜子今も枯束消ちり門くのちり若  
熱を雅容する手姿月よえらあて一但門くよ  
ちりとあつら後白せ一人の口よりあつらよ柳ん



かゝりの聲とありて一句たゞの字律句の  
人の他なる吟よ見えぬ

二書くささとりし果さば種まひく、 去来

是ハ正徳ノ一テ定まるかゝらなり強てかゝり  
をささとりしとせハ市井門ノの人なり其れを  
下ノ正文字種ヲおくことあれまゝに書きし  
田家ナリ身三ノ句ハ定まりて讀下しやま  
ぢれし心法は良しおしりしとばう見えぬ  
四句目をえんはる種を食しこの身三の付方  
ち一旬のおもむきしこまのまほひ見たまふん

ハ重耳から付方れあんの心はよれる  
原折たしくらあ一枚 北

是ハ小百姓の食するむしやるすうとなり

うゝあハ奥の名極凌の干物なる

此節ハ銀も足知し次不自由すよ 蕉

此ハ世々の様人違都をさる柳子路用此  
用をよめれも幸少なきやうなき不自由  
を恨むなり

但後句振付三句句目自他を嘆ひえれ  
四人各々一別人なり



くくといやうにたのきし船人 舟

是を梅人の舟中其を象牙揺らるまでし  
すく申揺らてつさこの風を包む月をた  
子をうけ立ちあう物よおぬあなり

舟むした蛙あそこの夕まされ 舟

是らたは猿差のとひやくした又わらひあは  
舟印下の蛙もここのへし是昔の付音前  
句はさよえぬを虚意より揺る来く前句  
の頭上を重くおれをおれた二句の音は限な  
きを我程生れ妙くとも舟一はまり決き五句の

付音舟部一松まり

落の芽とまよりの蛙やう清は 芝

是あのみむしは蛙をここのへしおれ落の芽は  
とありよまの時をり蛙をうをりてり蛙は清は  
七つりの身をふまひらるなり志のそまへん  
定る形は

及心のわらうは花乃つ白む時 舟

そりり蛙やう清はたのき何若とえれはを以  
髪かけく鹿まよと来りし人なり

能きの七尾は冬を恒ら交 舟



能登の七尾の山阿の溪冬疎まむやして凄  
かすも春もあははるる髪さけ襟衣の身と  
あんとおもひさして思へばあんなさまたた  
あねて羨心とあかきうして行め下りてあこ  
物持ちの侍りえ也

先きも上猿叢の老く前白中の言ふまに  
あき不慮をより振り来りて前白の如き  
あきそれをもあえハ二句の言ふまに我理生  
恨情かくのまゝ妙くともうし

奥の骨志をぬらまであ老をえんく 兼

是にうまをむれんかして髪さけ世我捨りて  
恒せしとなれハ髪志らあはさうに眼と身く  
あ皆あて魚の肉喰りあは志をああまてに  
老衰や身とあうい息の思案地となり  
侍人のいりし少所門の鑑 兼

鑑はま我あういりてにかきと讀おの害あり  
初付分ハ少所門といふも後宮の志あり志は  
大切のかきなりされし七十有余の老後髪  
髪をく水火ともあ老きて情厭さうにそ  
の役を勤る奄人よりし松たうなる老なりんか



きん老人は付く法人入るる婢女のかうりきり  
立かたり扇風を倒れ女も 飛

女もよきうして約束の人ひたした門入りたり  
そやうととこひを志のひはよ社殿あて  
是のをきし程と扇風をうらたやうたる目子  
んをこそ

海殿を伴ひの筆の子よひき 薫

扇風倒れ人去りて筆の子たより程きなり  
苗香の葉を吹散る夕阿し 末

初秋のひきさむさむさうに湯衣をうけ海夜の

筆の子り紙けり汗をいれり偽物目の  
苗香あり

こくに苗香の付方を只檀こころと見えと  
西の舟に堂するまゝ若香とよみ跡殿場を撰  
出でて一巻の蔵と香妙なり都七部は葉の  
巻くかぎりの跡殿あり言をよ侍をき教は  
ありおしりるきものありえりてとく  
味な少い

傳 やさむくちよかろあ 飛

夕嵐やよきく苗香ありよかろ跡をうら



有るものも僧ハ仏のつれごとハ秋寂の  
趣向なるべし初又僧を其の身なりと  
ちりありてハ孝はあらず降にへきに相は自  
然なり

猿川の猿と世を離る林の月

蕉

是ハ猿引と俗となりけり逢ふべし  
ては多事ななり月れハちりありて  
こゝろと先くおの極象一ちりありて  
を引て猿といふに雖もちり人生のちりかき  
ちり

年は一度の地子ははるかなり

東

猿引の身子やゆれはる物故若く猿を肩子  
のせしんをあかみ其のちりはちりなり  
そちりちりあかみてはちりと極り家これちり  
地子故ちりちりちり地子ハ年は一度の地子なり  
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

五六年生年木漬けは家儲り

飛

年は一度とふ何となく是の地子よりちり  
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり



地志け代の而も地行久し果しそ水たかり  
の不定地なりあう清かてくなく生年本を志  
をくおのみ空きたり

足袋踏よるは馬目あり

蕉

生年本清く系有たまりれ色黒居この及あり  
あやまつく足袋を踏よるたら新しき付句  
なり

追ひたてくあき河馬の刀持

来

是あけ子細なり追ひたてくあき辰子後れ  
しといそきて足袋をみよるたらあかり

二六

け足袋踏よるは馬目ありた系あを急刀持子踏られ  
もあうの滞り生年本清けと系といあ  
福よりさくになしすくき部集の老あ  
件多し女は男よりかの人を取てあの人  
し変化すともある

先きに著考する年子一度の地子とてあま  
四句あり高あしく俗人の揚子とてあ  
て部集といとも猿蓑老変の介いあ  
はる信しあし一他の土地をいあ  
てらあ病水二海し



泉の老水を荷ひりむ子なる馬をたせて暮ら  
りくと暮ると昼とてそく暮るんれを刀指と  
ある武家なりそれ出れのももなく相せまりて  
昼をさす家さちなくおそれあをそ打たせらる  
あやさるあをこゆるたあなり

戸侍子もむ一あふひの賣屋敷

けふあ何水をらちる一たると見れハ賣  
屋敷のあなり賣屋敷なれハ戸侍子とむら  
あこひして賣屋敷のたけなりあき屋一水を荷  
ひりハ賣用の子と知る能れとも賣用の用

とみ子何事もよく有るなりそれハ免々角  
もむ解りき家子水を荷し棄ておし一るく  
眼子見ゆなりなり

賣用の用陶師く家ハ空しき賣屋敷用いたあ  
ちうそあをりを作らき賣用の用なり一これ  
用子をむもいたああきこの字は出されハ  
此のれ用子略くたあ一はを魚て賣用を  
用のた免用ハ賣用のらち子ありそあのみも  
初心の人乃たあ子不能儲まら便り子あ  
そも子之なり



天井おもしろいつのあはれはく

混橋本末子あま清を井おもしろと子信申の  
通神も殿となくしあをり責を我のあは  
衆となつゝ家に志ぬかきのあはくははた  
けきめあらりて又あまを家よと井ま  
とりと子信神僕おもしろ

こそくと子難を此家月夜さし 記

あの子細首らつては月夜は海草さつては  
湖くちと夜とあつて月夜あつてはあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

此をたおしそとあはれ人の子は七とより  
いざいざ人あつて又橋の本と月夜の家とも同  
子んあつてあつて

書をあつていりおとす 蕉

何れあつて今以ていりおとすあをいりて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

そのあつてあつてあつてあつてあつてあつて 本

書をあつてあつてあつてあつてあつてあつて



子仕之け盡きたる升おとりのころひ落し奉る  
吾恩の境あり

わらひて蓋の合ぬ中櫃

飛

升おとりのころひ落し奉る吾恩の境あり  
蓋も居り次膏は仕之け盡きたるころひ落し  
分の内をたふさわくんと物の次ぎはそとにたれ  
中櫃のふくまぬはまの落しをたれぬみまふ  
この前もぬあり今膏のふくまぬはたぬのと  
あつとひ疎をうみそやう久くぬえありまひと  
おくものちり

夢庵子志をくく居くハホヤあり

蕉

庵ハ盡舎こたふきのけりりと例はよまハ出人の  
居も夢へて何人柄もおもむき有つハ一巻尾  
と後下一の要られハ何人ハ人さ巻のたもとに  
那らちるき坊敷なるハ一因てハから身と乗り  
やあま世の交りのまわつてさるもななくころまに  
何けあま終棟市子さそとていらハ山子もかたれん  
まといまてえぬむなとぬくえんあゆめらうとま  
あおしむきありだハ一は向のほくまの巻のあ  
が中櫃尾のまむのち治むらうらうものなり







此の留まるとなれたらひらき板敷

祀

是を寵をうけかかるとも女の前より言と  
笑ひ長く此の留まるとも女の前より言と  
一發おもしろいことにはさびしく思ふけさ  
女の情状より病のさびしく思ふことあるは  
果おもしろいこと

子のひらに乱れたいま身花のわけ

莖

板敷にたへうすきならぬあうはらま身花  
花のわけありを思ふなりけり愛付方の精進を  
深く味ひたふといひぬさ

三十一

あうこのぬ登の戦とさ

束

子のひらにたへみま身花のひらに思ふ優衣の日  
なりあうこのぬ登の戦とさきま身花といふ  
但此の戦とさきま身花といふは  
しな一あけの晴かきぬさ



猿蓑四歌仙解卷二



